

5 おわりに

ハーンカー、リバート、ザーウィヤはスーフィーのために作られた施設だと考えられてきた。もちろんその側面を否定することはできないが、しかし、これら修道場にはスーフィー以外の人々も多く存在していたことが、『エジプト誌』の記述を分析することで明らかになった。これらの修道場には、寡婦や貧者など社会的弱者の生活を一時的に保障するための場として、また子供たちや学生の学習の場として重要な役割を果たしているものもあった。また支配者の権力や公正さを示す場として、あるいはシャイフへの個人的尊崇や死後の安寧を保証するための場としての性格も読みとることができる。

ハーンカー、リバート、ザーウィヤはスーフィーの修行のための場としてのみ機能していたのではなかった。修道場は当時の社会や人々の生活を円滑にするための様々な役割を担っていたのである。

(一) Little, D.P., "The Nature of Khangāhs,

Ribāts, and Zāwiyas under the Mamlūks",

W. B. Hallaq & D. P. Little (eds.), *Islamic*

Studeis presented to Charles J. Adams,

Leiden, 1991

(2) Fernandes, L., *The Evolution of a Sufi*

Institution in Mamluk Egypt: The Khan

qah, Berlin, 1998

〈西洋史学専修〉

バエティカの都市

—ローマ化と都市有力者—

福山 佑子

はじめに

バエティカ地方（現在のスペイン南部）

はローマによる征服以降、ローマ化が早期

に進み、トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝、

セネカ父子、ルカヌス、マルティアリスな

どのローマ帝国に多大な影響を与えた人物

を輩出するなど、属州ではあるものの、ロー

マと深い繋がりを持つ地域であった。この

バエティカのローマ化については、以前は完全にローマ化がされたとみなされてきたが、現在では土着の影響も深く、ローマ化の程度には地域差があったと考える説が有力となってきている。このバエティカのローマ化に際し、重要な役割を果たしていたのが都市であった。都市はローマと先住の人々を仲介し、その都市の内部においても、都市の上層部の人間がローマの人々と先住民を仲介していた。本稿の目的は、これまであまり注目されてこなかった属州住民、特に都市有力者の「ローマ」に対する意識からバエティカのローマ化の要因を明らかにする事である。そこで、まずローマによる支配がどのような状況の上に行われたのかという事について考察し、続いて都市法等の公的側面、植民者や商人等の人的側面、ラテン語教育等の社会的側面からローマ化の進展の過程を検討する。そして最後にイルニ都市憲章からローマ化を仲介した都市有力者の立場及び彼らの意識を明らかにする。

第1章 ローマ以前のバエティカ

ローマ以前のバエティカにはイベリア人やケルト人などが点在した集落の形で定住していた。彼らは独自の意識を持っており、地域や民族ごとに共同体を持っていたわけではなく、多数の集落の集合体とも言えるような状況にあった。言葉にも多くの違いが存在するなど、個々の独自性も強く、民族的には近似していたものの、同一民族としての意識は薄かったと考えられている。その一方で、かなり以前から法や歴史や詩歌を持つなど、文化的には発達した地域であり、同時に地中海東方地域においてもその名を知られるなど、他の地域との交流も活発だった。その背景となっていたのがバエティカから産出される鉱物や農作物の豊かさであった。これらが地中海の諸民族を呼び寄せ、バエティカにはフェニキア人、ギリシャ人、カルタゴ人などが交易のために到来し、植民市を作ったりもした。しかし彼らのバエティカにおける活動は交易の拠点としての植民市建設にとどまり、広い

地域を支配しようとするものではなかった。だが、これらの民族はバエティカに交易などを通じて様々なものをもたらしたと考えられる。それゆえバエティカは古くから高い文化をもち、さらに地中海全域と深いつながりを持った地域であったと推測される。そしてこのような状況の上にローマ人の支配は行われた。すなわち未開のバエティカをローマが文明化したというのではなく、元々高い文化を持った土地にローマの支配が及んだという状況であったと考えられる。また、様々な民族が到来していたということは異民族との接触も多く、異文化を受け入れる素地ができていたとも考えられるのではないだろうか。

第2章 バエティカのローマ化

ローマ化の進展を示しているのが都市の法的地位の変遷である。アウグストゥス帝の時代には被征服都市としての貢納都市が多数を占めたのに対し、時代が下るにつれてローマの法制度を持つ都市は増加し、フラヴィウス朝期までには多くの都市が自治

市の地位を獲得している。また、バエティカを扱う際に重要な史料となっているフラヴィウス自治市法のように、都市に自治市のような法的地位と共に、都市の運営等に関して詳細に扱った都市憲章を付与することでローマの理想とする都市像をバエティカの諸都市に伝えることも行っていた。そして、法制度と共に大きな影響を与えたのがイタリア半島からの入植者である。初期には退役軍人が入植し、現地住民と混住した都市を形成していた。また商人たちも多く訪れ、彼らもまたバエティカにおいて多くの人々と接触し、ローマの文化や慣習を伝える役割を果たしており、これらの入植者、商人、役人などを通して、バエティカ地方のローマ化は進んでいったと考えられる。

当時、西方属州の大都市においては、たいていの裕福な家庭の子供は七才から一才まで家庭で読み書きや算数などの初等教育を受けていた。また、特に裕福な家庭の子供達には、初等教育に続いて弁論のため

にラテン語やギリシャ語の弁論術の教育が行われた。バエティカにおいても弁論の学校がガデスやコリッポをはじめとして各地に存在し、タラコではバエティカ出身の教師が教えていたとされている。バエティカは帝政期以降、セネカ父子、ルカヌス、マルティアリス、クインティリアヌスなどの多くの著述家を輩出した地でもあった。例えばセネカはコルドバの裕福な家に生まれ、初等教育等をコルドバを受けた後にイタリアでラテン語教育を受けたとされる。次第に文法学校が増加するなど、イベリア半島におけるラテン語教育は徐々に盛んになっていく。それはローマの政治家の意図だけでなく、セネカらのローマへの進出を自身の将来像、もしくは自らの子供の未来像に重ね、ラテン語の習得に励む地元の富裕層の存在が背景にあったことはいままでもない。社会の中で上層にある者が自分よりも大きな権力をもつ者に目を向けるのは当然のことではあるが、ラテン語教育の普及は富裕者層の意識がローマに向いていた

ことを如実に示しており、その過程がラテン語教育において端的に現れている。

以上のように、バエティカ地方のローマ化がかなり進んでいたことは明らかであった。アリメンタ制度が存在し、ラテン文法教育においてはラテン文法学校のみならずバエティカ出身のラテン文法教師が存在するなど、インフラ整備による都市の外観だけでなく、社会の中にもローマ化がかなりの程度浸透していたことが窺える。

第3章 都市と都市有力者

このローマ化を土着の人々にもたらす際に介在していたのが都市有力者であった。そして彼らの中にはイタリア半島からの入植者だけでなく、現地の有力家系の人物も含まれていた。元々地域ごとに独自性が強かったと考えられるバエティカ地方の都市においては、現地の都市有力者はそれぞれの地域を統括する立場にあったと推測され、ローマは彼らを都市の支配層としてローマの都市制度の中に取り込むことで、既存のヒエラルキーを巧みに利用したと考えられ

る。一方、ローマの都市制度において、都市有力者は公職就任と深く結びついていた。しかし公職には幅広い権限と共に多くの義務が伴うため、莫大な経済力が必要であった。従ってこれらの特権階級は大土地所有者などのごく一部の人々にしか門戸が開かれていなかった。しかし一部の地元の人間に特権を与えることでローマから都市有力者へ、都市有力者から一般の人々へという意思伝達は容易になっていった。すなわちローマは既存の有力者をローマの都市制度の中に取り込むことで、独立性の強い地域において個々の都市をローマ社会の中に位置付けることができたとの解釈も可能である。

このような都市有力者となった人々、それを目指す人々の意識を反映していると考えられるのが、フラヴィウス自治市法の一つであるイルニ都市憲章に付属するドミティアヌス帝の書簡である。同史料では、この都市憲章で定められている公職への就任を経てローマ市民権を獲得するという公認さ

れた方法ではなく、ローマ市民権を持つ者との結婚によってローマ市民権を獲得するという公認されていない方法を禁止することが定められている。この事は皇帝の書簡を公示する必要に迫られるほど多く行われていたということを示すと同時に、

municipium の住人がローマ市民権の獲得に対してかなりの熱意を持っていたということが窺える。人が社会の中で地位の上昇を望むのは当然の意識であるが、それをローマの制度の枠内で目指していたということ、彼らが自身をローマ帝国の一員として意識していたということの現れである。また、同じフラヴィウス自治市法の一つであるマラカ都市憲章では *damnatio memoriae* によってドミティアヌス帝の名前が消されているのに対し、イルニ都市憲章ではドミティアヌス帝の名前は消されておらず、イルニはローマと強い関係を持っていなかったことが窺い知れる。 *damnatio memoriae* が徹底していなかった都市でさえ、ローマ市民権の獲得に強い熱意が見られたという

ことは、植民などの直接の影響を受けた地域だけでなく、バエティカ地方のかなり広い範囲に渡ってローマ帝国の一員という意識が浸透していた証拠であると考えられる。

おわりに

バエティカのローマ化は都市有力者と密接に関連しており、彼らはローマの意思の伝達者であると同時に都市住民の代表でもあった。また、バエティカにおいてローマ化はかなり深く浸透しており、ローマとの関連が薄い都市においてさえ住民の意識はローマに向いており、彼らは自らの地位の上昇もローマ的な制度の枠内で考えていた。ローマはバエティカを支配する際に住民の意識を巧みに利用していた。すなわち、現地住民に多くの権利を獲得する機会を与えることで、彼らの意識をローマ的な制度の枠内に置かせ、その上昇意識を利用してバエティカを安定した属州へと導いたのである。

〈考古学専修〉

尾張における弥生集落の展開

川辺 知子

弥生時代集落研究において田中義昭が提唱した概念、「拠点集落」と「周辺集落」は、現在まで多くの集落研究に影響を与えてきた。しかし、近年の発掘調査や土器の細分化が進んだ結果、弥生集落の動態を把握することが可能となり、「拠点」と「周辺」という静態的な二項関係では弥生集落の実像が描き出せない点が指摘されている。

尾張地域では、一九九〇年代以降になってようやく弥生時代研究の主題として集落を扱うようになった。しかし、現在でも黒立人の研究に負うところが大きく、議論が活発であるとは言い難い状況である。

そこで本稿では、全国屈指の環濠集落であり、尾張地域の代表的な集落遺跡である朝日遺跡とその周辺に位置する阿弥陀寺・森南・大洲の三遺跡を中心に、「拠点集落」